文脈指示語に對する漢文訓讀の影響

井手至

一

佐久間鼎博士が指摘された(註1)やうに、國語の指示語には所謂コソアドの强固な指示體系が存する。ところで、指示語は、一般にその使用せられる指示の場の相違によって、現場指示語と文脈指示語とに分けることができる。いま、このやうに指示語を二分して考察するならば、現場指示語の方は、コソアドの指示體系に甚だ忠實であるが、文脈指示語の方には、時折その指示體系より外れる用法に立つものが見出される。そのやうなコソアドの指示の體系を逸脫した文脈指示語は、所謂言文一致運動以後の現代語の文章中にも見出されるが、現代語の場合には、それはそれとして一つの秩序を保ってゐると考へられる。ところが、古代語の場合には、漢文訓讀の影響が顯著で指示の秩序はかなり亂されることがあるのである。

思ふに、文脈指示語は、文章の展開の場たる文脈を指示の場とする指示語である。文脈指示語は、往々

(1)㋑　二三日立ってから岡田に逢ふと向うからかう云ひ出した。「君はひどい人だね。僕が折角見つけて置いた金瓶梅を買ってしまったぢゃ無いか」(森鷗外「雁」)

㋺　多くの東京人がさうであるやうに執方かと云へば出不精の方で、めったに旅行などしたことのない要は、……(谷崎潤一郎「蓼喰ふ蟲」)

のやうに、後行の表現内容を指示する場合もあるが、主として、

(2)㋑　あのひいひいと風邪聲のやうなかすれた聲で啼いてゐる方がピョニーであらう。彼女は夫や弘ほどに犬好きではないのだけれど、此のピョニーはいつも歸りが十時過ぎになる時には、……(同右)

㋺　しかし太夫はだんだん本職に近いやうなのが床に上る。それを一方の棧敷から、「どうだ、わしの村の太夫はうまいもんだらう、みんな靜かに聞いてくれ」と、同じ村の人らしいのが聲援すると、……(同右)

のやうに、先行の表現内容を後ろから指示することが多い。いま、(1)の如き場合については別の機會に讓ることとして、文脈指示語の使用の大部分を占める(2)の如き場合に限って考察を進めることにしたい。

先づ、現代語の、先行の表現内容を指示する文脈指示語に關して、概括的に結論を述べれば、現代語においては、それは一般に現場指示語と同じく、コソアドの體系に忠實であるといへる。漢

文訓讀の影響の一般化してゐる近代語（古代語に對する）の文章についても、それが口語的であればあるほど、さういった方向に向ってゐるといふことだけは確めておいてよい。そして、そのやうな傾向は、明治の所謂言文一致運動の成果が擧がるにつれて急速に強まったのである。ところで、具體的に(2)の例について考へてみるならば、㋑の「こ(の)」は、純粹に指示機能のみを果したものであり、㋺の「それ」は、㋑に反して指示機能の他に代表機能をも兼ね併せもってゐる。㋑の如き文脈指示語にあっては、全く現場指示語なみの強さでコソアドの體系に則った指示性が發揮されるのに對して、㋺の如き代表機能をも兼ねた文脈指示語にあっては、ともすれば、その重點が相對的な指示よりも代表といふ機能に移行する場合も生じ易くなる。コソアドの指示體系に則った強い指示性をもたず、單に先行の表現内容を絶對指示的に承けて代表するものが見出されるのである。

Ⓐ 彼女は一と言「有りがたう」と云った。その眼瞼からはぽたりと嬉し涙が落ちた。（谷崎潤一郎「蓼喰ふ蟲」）

右の文中に見える中稱の文脈指示語「そ(の)」は、先行の表現内容の一部たる「彼女」を指示し且つ代表してゐる點において㋺の「それ」と同趣の文脈指示語であるが、この「その」は近稱の文脈指示語「この」を以てしては言ひ換へ難い。このことは、㋑の近稱の文脈指示語「この」が中稱の「その」で言ひ換へられ、また、㋺の中稱の文脈指示語「それ」が近稱の「これ」で指示し換へることができるのに對比すれば、注目すべき事實であるといはねばならない。思ふに、先の㋑の文においては、話手（筆者）が先行の表現内容の一部たる「ピオニー」を己れの勢力範圍内のものとして把握したために、所謂近稱の文脈指示語「この」が用ゐられてゐるのであり、㋺の場合は、先行の表現内容を聞手（讀者）の勢力範圍内のものとして意識して、それを中稱の文脈指示語「それ」で以て指示してゐるのである。一般に、先行の表現内容は、通常近稱か中稱の文脈指示語で指示されることが多く、遠稱の文脈指示語はあまり用ゐられないが、それは、文章を書く場合には、一般に我々には改まった氣持があり、筆者（話手）と讀者（聞手）との間に或る程度の距離が意識されるために、先行の表現内容が大抵話手の勢力範圍内（近称）か聞手の勢力範圍内（中称）かのいづれかに位置せしめられるのに對して、筆者と讀者との間に距離が介在する故に、讀者が筆者と同一の圈内に心理的にくみ入れられて先行の表現内容がその圈外の位置、即ち遠稱の位置において把握せられることが少いからである。即ち、一般的に考へれば、先行の表現内容は、既に聞手に受け取られたものとして、中稱の文脈指示語で指示することもできる一方では、いま表現せられたばかりの事柄であるために一旦話手よりはなれはしたがなほその間近かに在ると意識することもできるので、それを近稱の文脈指示語で指示することもできるのである。かくて、話手が指示の場における對象に對する把握の仕方を變へることによって、㋑の文においては、近稱の「この」が中稱の「その」に、㋺の文においては、中稱の「それ」が近稱の「これ」に置き換へられることは至極當然の現象である。しからば、Ⓐの「その」を「この」で指示し換へることに抵抗が感じられるのは何故であらうか。

そもそも、Ⓐの文に見えるやうな「その」が國語の中に頻りに用ゐられるに至ったことについては、嘗て一言した如く（註2）、

それは、漢文訓讀の影響であった。それは、漢文中に多く用ゐられる、領位に立つ絶對指示的な承前詞「其」義諸字を「その」と訓讀したからに他ならない。訓讀語「その」は、國語においては、所有格又は連體句の主格に位置せしめられ、例へば

○今昔、元興等ノ中門ニ二天在マス。其ノ使者トシテ夜叉有リ。（今昔物語、巻十七ノ五十）

○夫人ノ共ニ從ヘル綵女八萬四千人也。其ノ乘ル車十萬也。（同、一ノ二）

のやうに用ゐられ、右のやうな場合に、「その」の代りに近稱の指示語を用ゐて「この」と表現せられることは殆ど無かった。これについては、國語で近稱指示語に訓まれるべき承前詞「之」義諸字が漢文中にあって領位に用ゐられることが少く、たとへ用ゐられてゐても、國語の近稱の「この」には、中稱で「その」と用ゐられた時ほどに承前代表機能が強く感じられなかったことも手傳って、「之」の類が「この」と訓まれず、「これが（の）」と訓まれることが多かったことも關係してゐる。が、とにかく、訓讀語「その」の使用は、中世の和漢混淆文に受け繼がれて一般化した。即ち、Ⓐの如き「その」は、いはば承前代表詞ともいふべき絶對指示的な指示語であって、決して、コソアドの體系に基づいた相對的な指示性はもってゐないものと考へられる。それは、國語の强固なコソアドの指示體系を逸脱した用法である。其の點においては、山田孝雄博士の指摘せられた（註3）漢文訓讀の影響で傳へられた、

Ⓑ　大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

の如き文に見える提示語再歸法の「これ（之）」と規を一にする。

Ⓑの「これ」は中稱の「それ」で置き換へることはできない。そのことは、「これ」が先行の提示語「大日本帝國」を絶對的に指示代表してゐること、コソアドの指示體系に準じた相對的指示語でないことを示してゐるからである。ところが、Ⓑの提示語再歸法の「これ」は、所謂普通文（明治前後に通用の實用的文語文）には用ゐられたが、現代語においては、法律文とか餘程文語的な文章中でない限り用ゐられることがなくなってゐる。思ふに、同じ漢文訓讀の影響による絶對的な指示語でありながら、Ⓐの「その」は、言文一致運動以後の現代語にも傳へられたのに反し、Ⓑの「これ」は現代語に殘されなかったといふことには何等かの理由がなくてはならない。Ⓐの方は、確かに明治以後盛んとなった歐文翻譯の場合に it's 等の譯語として好適なために用ゐられたといふことがそれに影響してゐることは認めねばなるまい。しかし、文脈指示語に關する限りは、歐文翻譯の影響は慣用句又は慣用的表現或は語彙的な範圍に限られるかと思はれ、其の點、文字に引かれた翻譯であるところの漢文訓讀の影響の方が大きいのである。私には、Ⓐの「その」は現代語に傳へられ、Ⓑの「これ」は使用されなくなったといふ現象に關して、もっと國語自體に內的な必然性が求められはしないかと考へられる。いふならば、國語においては、所謂中稱の文脈指示語は、近稱のそれよりも或場合には、より一層絶對的な指示語、即ち國語のコソアドの指示體系に基づかない指示語となり易い環境に置かれてゐるのではあるまいか。歷史的にいふならば、上代の國語には、中稱の代表機能を兼ね備へた文脈指示語「そ」に通用せられることのあった指示語「し」があり、人稱代名詞として用ゐられる一方では絶對的な指示機能

をもって承前代表詞として使用せられてゐたらしい（註4）といふことも、この場合参考とならう。が、それはさて措き、先行の表現内容を承けて指示する場合には、一般に、中稱の文脈指示語よりも近稱の文脈指示語の方に、一層、コソアドの體系に準據した相對的指示機能が強いのではなからうか。卽ち、先行表現の内容は、順當にいへば現に聞手に理解されたものとして聞手の勢力範圍内のものであるために、それを中稱の文脈指示語で指示することは當然で何等の抵抗もないにかかはらず、先行の表現内容を近稱の文脈指示語で指示するとなると、一旦聞手の側に入った、その表現内容をもう一度話手の側に引き戻して身近かなものとして意識し把握する必要があるために、その指示は漫然たるものではなく、必然的に抵抗に打ち克つだけの強さを持った指示とならざるを得ないのである。かくて、先行の表現内容を指示する場合には、それを強く話手の側に引張りこんで指示する近稱の文脈指示語に比して、それほどに、そのやうな場合指示の力の強く働かないと考へられる國語の中稱の文脈指示語は、元來、たゞ單に先行の表現内容を承けるだけの絶對指示的な承前代表詞となりやすい傾向を帶びてゐると考へてよいのである。このことは、國語の接續詞を構成した指示の要素に、現代語において

さういへば・さうしたら・さうして・さうすると・さうだけれども・そこで・そこへもってきて・そして・そのうへ・そのくせ・それから・それだから・それで・それでも・それどころか・それとも・それなのに・それに・それも・さて・しかし・しかしながら・しかも・そもそも……

等のやうに、中稱の指示の要素が多いが、それらには、全くコソアドの體系に則った中稱指示性は認められないことからも理解できる。例へば

○ルイズのことばかり考へて來たのに不意を打たれたせゐか知らん？　それとも陽氣の加減か知らん？（谷崎潤一郎「蓼喰ふ蟲」）

において、叙述ぐるみの先行の表現内容を承けてそれと後行の表現との間の關係を主體的に表現しつつ兩者を接續してゐる接續詞「それとも」の如きには、そこに語源的には中稱の文脈指示語が含まれてゐるが、これを近稱で「これとも」といひ換へることができないやうに、それは既に絶對的に先行の表現内容を承けて代表するものに變化してしまってゐるのである。このやうに、中稱の文脈指示語を含む連語に接續詞化するものが多いといふことは逆に、中稱の文脈指示語が絶對指示的なものに移行し易いといふことを示したものといへる。一方、近稱の指示の要素を含んで構成された接續詞は僅かに、元來相對的指示性において不安定で、且つ後述するやうに近稱指示性が近代語においては徐々に薄れてきた、カ系統の「かくて」「かくして」等があるのみであって、生き生きとした近稱指示性を有するコ系統の要素を含んだ接續詞は後述の「ことに」を除いて全くない。先行の表現内容を承ける場合の近稱の文脈指示語のもつ近稱指示の力の強さを思ふべきである。以上のことから、國語自體の文脈指示語の指示性に根本的には卽應する中稱の文脈指示語の絶對指示的用法たるⒶの「その」は漢文訓讀の影響により賓されたものであったにもかかはらず、現代語においても用ゐられ、一方、同じ漢文訓讀の影響によるものでも、國語本來の文脈指示語の指示性から見て相納れるこ

とのできない近稱の文脈指示語の絶對指示的用法に立つ㊁の「これ」は、漢文訓讀の影響の減退と共に現代語には殆ど抹殺されてしまったのである。

二

ところで、これに對して古代語は如何であらうか。漢文の領位に立つ承前詞「其」の訓讀の結果齎された影響については前節に述べたが、古代語にあって、特に注意せられることは、近稱の文脈指示語が頻繁に絶對指示的用法をもち、また、近稱の指示の要素を含んだ接續詞が多く用ゐられてゐるといふことである。

近稱の文脈指示語の絶對指示語として用ゐられたと考へられるものには、既に㊁の如き提示語再轉法の「これ」を擧げたが、古代語にあっては、それを含めて廣く目的格（を格）に立つ「これ」が絶對指示的に用ゐられてゐるやうである。

○淨居天變化シテ病人ト成ヌ。身羸レ腹太キニフクレテ喘ギ吟フ。太子此レヲ見給テ問テ宣ハク。（今昔物語、巻一ノ三）

右のやうな近稱の文脈指示語「これ」は、別稿（註2）に述べておいたやうに、漢文中に用ゐられた賓位に立つ承前詞「之」義諸字が文字通り「これ（を）」と訓讀せられ、且つ、漢文中には、これに對して「之」の代りに國語で中稱指示語に訓まれる「其」義諸字が賓位に用ゐられることがなかったために、上代の散文をはじめ、漢文訓讀の影響の著しい中世の和漢混淆文等（註5）においては、話手の主體的な先行表現の把握による指示ではなく、先見的に、目的格には專ら近稱の「これ」が用ゐられ、中稱の「それ」が用ゐられることは殆どなかったのである。例を今昔物語にとるならば、漢文の影響の顯著な天竺震旦部では目的格には殆ど「これ」が用ゐられ、巻一等では全く「これ」で統一されてゐる。そして本朝部においても、地の文の目的格には「それ」の使用は稀で、會話文に往々それが見出される程度である。このやうに排他的に「これ」が目的格に用ゐられてゐるといふ事實は、その「これ」が國語の指示の體系たるコソアドの體系に則った使用を受けてゐないことを明らかに示してゐる。そのやうな「これ」が絶對指示語として先行の表現内容を非限定的に指示代表したであらうことは否定できない事柄である。ところで、漢文訓讀の影響が國語から薄れるに從って、口語的性格の强まった近代語の文中には、中稱の「それ」が目的格にも自由に用ゐられるに至る。このことは、漢文訓讀の影響のある文章中において絶對指示的に用ゐられてゐた目的格に立つ「これ」が近稱指示的なものとして新たに意識されて來たことを示してゐる。そして現代語においては、むしろ、中稱の「それ」が目的格に立つことの方が多くなって來てゐるのである（註6）。現代語の文脈指示語は、その本來の用法に反する點が少いといふことを、先に論じた所以である。また、山田博士が漢文訓讀の影響から、所謂普通文に「かくの如し」が用ゐられることを指摘された（註3）が、「若是」「如斯」の類の訓讀語たるそれは、古代語において、絶對指示語の樣相を强く帶びてゐた。國語で「しかのごとし」といはれることもあるにはあったから、中世の和漢混淆文においては、本來ならばそのやうな中稱の文脈指示語を含む連語も用ゐられるべき筈であるのに、專ら、近稱の「かくのごとし」「かくのごとく」「かくのごとき」が漢文訓讀の影響から用ゐられるのである。これらは、語源的に

は近稱の指示の要素を含むために近稱指示語の語感を伴ふが、漢文訓讀調の濃い文章中における用例はやはり少くとも承前代表的な絶對指示の機能を持つてゐると考へるべきものである。

既に述べたやうに、現代語においては接續詞中に見出される指示の要素は、ソ系統のものを主とする中稱の指示の要素が多く（このことは、漢文訓讀の影響の少い中古文（和文系統の物語等）に見える接續詞又は接續詞的な連語についても同樣）その他には、近稱のカ系統の指示の要素を含んだ「かくて」「かくして」等が文語的なかたい文中に見出されるのみで、近稱のコ系統の指示の要素を含んだ接續詞は全く見出されなかつたが、そのことは、中世末期に、コ系統の指示語に副詞的な「コウ」の生ずることによつて、元來、遠稱にも近稱にも用ゐられ、相對的指示性の不安定であつたカ系統の指示語が益々壓迫せられ、近稱としての相對的指示性を薄め、遂には文語として絶對指示的なものとなつたのに反し、コ系統のものは、近稱の指示語の代表的なものとして生き生きと用ゐられ、先行の表現内容を指示する場合に、常に強い近稱指示機能を發揮するためと考へられる。ところが、古代語においては、連語に含まれたカ系統の近稱指示語はいふまでもなく、コ系統の近稱指示語までもが絶對指示語化して接續詞を構成してゐるのである。先づ、カ系統のものとしては、

○如此白而。逕入其殿内之間。甚久難待。故（カ）刺左之御美豆良湯津津間櫛之男柱一箇取闕而。……（古事記、上）

○般若波羅蜜ヲヲコナヒタマ（ハ）ヌヨリホカニハ、諸佛ノ正覺ナリタマウ事ナシ。カルガユヘニ、「依般若波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提」トノタマヘリ。（法華修法一百座聞書抄）

の如きものが見える。前者は、語源的には宣長（註7）の説く通りであり、漢文の「故」の訓讀語として固定することによつて接續詞化し、又後者も、はじめは「シカルガユヘニ」といふ中稱の文脈指示語を含む連語に對立すべき近稱の文脈指示語「カカル」を含む連語であつたが、「故」「尋」等の訓讀語として用ゐられることによつて接續詞となつたものと考へられ、後者は近代に入つても用ゐられることがあつた。ところで、漢文訓讀の影響は、國語の指示の要素を含んで構成される接續詞の構成の上にも國語本來の秩序に大いに反するものを導入した。既に述べたやうに、國語においては、コソアドの體系に基づいた指示機能が強く、全く接續詞化することのなかつたコ系統の近稱の文脈指示語を含んだ連語が接續詞として使用されたからである。即ち、漢文においては、「繼事之辭」或は「承上生下之辭」とせられる「於是」の類、「是以」の類、「由是」の類、「是故」の類（註8）の接續詞が用ゐられてゐる。それらには、共通に、國語で近稱の指示語で訓まれるべき「是」の類の文字が含まれてゐるところから、夫々、「ココニ」「ココ（コレ）ヲモチテ（モテ）」、「コレニヨリテ」、「コノユヱニ」と訓讀せられ、古代語の文中においても接續詞として用ゐられたのである。これらの訓讀語たる接續詞は、

○……皇孫命能近守神登賣置天、八百丹杵築宮爾靜坐支。是（コヽ）親神魯伎・神魯美乃命宣久。……（出雲國造神賀詞）

○……伊邪那美命言。愛我那勢命。爲如此者。汝國之人草。一日絞殺千頭。爾伊邪那岐命詔。愛我那邇妹命。汝爲然者。吾一日立千五百產屋。是（コヽ）以一日必千人死。一日必千五百人生也。（古事記、上）

○今日方大新嘗乃猶良比乃豐明聞行日仁在。然此遍能常與和別仁在故方、於方佛能御弟子等之豆菩薩乃戒乎受賜天在。此仁依天上都方波三寶仁供奉、……（續紀宣命、三八詔）

○其ノ母舍利弗ヲ孕メルニ、腹ノ中ニテ智恵有テ、母ガ腹ヲ破テ出ナムトス。是ニ依テ母鐵ヲ以テ帶トセリ。（今昔物語、卷一ノ九）

○猶心乎改天直久淨久在波、天地毛憎多麻波受君毛捨不給之天福乎蒙、身毛安泰牟。生天方官位乎賜和昌、死豆波善名乎遠世爾流傳天牟。是故先乃賢人云天在久。（同、四五詔）

○其ノ故何トナレバ、苦行ヲ修スレバ心惱亂ス。樂ヲ受レバ心ニ樂着ス。此ノ故ニ我レ苦樂ノ二道ヲ離レテ中道ノ行ニ隨テ……（今昔物語、卷一ノ八）

のやうに、古事記、祝詞、宣命等上代の散文は勿論のこと、「是以（コヽヲモチテ）」を除けば、中世の和漢混淆文にも用ゐられるに至り、「ここに」の如きは所謂和文系統の土佐日記（訓讀文の影響あり）にも使用せられてゐるのである(註9)。

○その院、むかしを思ひやりて見れば、面白かりける所なり。しりへなる國には松の木どもあり。中の庭には梅の花咲けり。ここに人々の曰く「これむかし名高く聞えたる所なり……。」（土佐日記）

さうして、これらの接續詞の用ゐられた文章中には、「そこに、そこをもちて、それによりて、そのゆゑに」等の語は全く見えない。漢文の助字には、國語で中稱に訓まれる承前詞「其」の類を用ゐた「於其、其以、由其、其故」の如き用法がないからである。「ここに、ここをもちて、これによりて、このゆゑに」が近稱の文脈指示語を含んだ連語でないことは、前記の中稱のもので以て置き換へ難いことによって明らかであり、その近稱の指示の要素は實は絶對的指示の機能をもったものなのである。ところで、これらの接續詞は、國語の近稱の文脈指示語の有する性格に反して、その中にコ系統の近稱の指示の要素を有してゐたがために、廣くそれらが近代語にまで受けつがれることなしに終った。接續詞の未發達であった古代語においてこそ、これらの接續詞も、そこにコ系統の近稱の指示の要素を含みつつも漢文訓讀の影響から、國語の中に食ひ込むことができたのであったが、そして一時は「ここに」のやうに所謂和文系統のものにまで用ゐられたのであったは忘れられ、又一部（これによりて、このゆゑに）は國語の中稱の文脈指示語（それ、その）と對立せしめられることによって近稱指示語としての指示性を恢復し接續詞が分解して、文脈指示語を含む連語となって漢文訓讀臭の薄れた近代語には使用されるに至るのである(註10)。

漢文訓讀の影響は、古代語（但し和文系統のものを除く）において、コソアドの體系に則った強い指示機能を文脈指示語、特に近稱のそれは有するといふ國語本來の秩序を破り近稱の文脈指示語を絶對指示的に使用せしめ、且つ、コ系統の近稱の文脈指示語を含む連語を以て接續詞たらしめたのである。現代を除けば、我々は常に漢文の影響を受けつづけて來たわけであるが、それが、近代には、むしろ儒教思想と結びついた思想面で影響したのに對し、文章、文體の未發達な古代においては、文章の規範として、また訓讀を通して言語面で大きく影響を及ぼしてゐたのである。

以上、漢文訓讀の國語の先行表現を承けた近稱並びに中稱の文脈指示語に與へた影響の中、コソアドの指示體系を逸脫せしめるに至った幾つかの現象について述べ、主として、漢文訓讀の影響の顯着な古代語と、近代語（現代語）との間に看取せられるその差異について考へた次第である。（三〇・六・二〇）

註1　佐久間鼎博士『現代日本語の表現と語法』

註2　「國語國文」昭和二十七年九月號所載拙稿參照。

註3　山田孝雄博士『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』

註4　「萬葉」昭和二十七年十月號所載拙稿參照

註5　和文系統の竹取物語、土佐日記にも、目的格に「これ」の使用が極度に多い。

註6　註2。なほ、三上章氏『現代語法新說』一八六頁。

註7　本居宣長『古事記傳』卷一。

註8　劉淇『助字辨略』等。なほ、類としたのは、「是」の代りに「茲、此、斯、焉」等が用ゐられ、例へていへば「因此」とあっても「由是」と同義であるからである。

註9　築島裕氏「土佐日記と漢文訓讀」一六二―一六三頁。

註10　「ここに」は僅かにやゝその用法を異にして現代語の體系内に收まって命脈を保ってゐる。

〔追記〕本稿は昭和三十年五月二十九日京都大學における國語學會の席上で發表した原稿の一部を骨子としたものである。

―大阪市立大學助手―

「國語學」のバックナンバーについて

左記の各輯は在庫品が少々ありますから、御希望の方にはお頒ち致します。本學會事務所（東京都文京区東大文學部國語研究室内・振替東京一七七八二三番）宛お申込み下さい。

第六輯　A5一二六ページ　一三〇圓
第八輯　A5一一二ページ　一三〇圓
第九輯　A5一二八ページ　一五〇圓
第十輯　A5一一二ページ　一五〇圓
第十一輯　A5一二〇ページ　一五〇圓
第十二輯　A5一一八ページ　一五〇圓
第十三・十四輯　A5一二四ページ　一五〇圓
第十五輯　A5一一〇ページ　一五〇圓
第十六輯　A5一二四ページ　一五〇圓
第十七輯　A5一三八ページ　一五〇圓
第十八輯　A5一二八ページ　一五〇圓
第十九輯　A5一二八ページ　一五〇圓
第二十輯　A5一三六ページ　一五〇圓
第二十一輯　A5一六〇ページ　一五〇圓

（送料各冊一六圓）